

御座についているお方 詩篇 110:1-7

2022. 3. 6 (弥生) 丘の上 NO. 676
春日部福音自由教会 山田豊

本詩篇は、新しい王が着任するときの式辞であると言われています。1-3節には、王は神の右の座に着いて、権威と力を持っている方であることを表しています。4節には、その王は祭司でもあるといえます。その例証として、かつてアブラハムの戦勝の記念にやってきた、メルキゼデク王になぞらえています(創世記 14:17-20)。そして、5-7には、再び力ある王の姿が、敵を打ち負かす様子として描かれています。今日では、もちろん戦争反対ということですが、イスラエルの国が他の国や民族と戦っていた歴史を踏まえて、書かれています。

詩篇 110 の 1 節は、新約聖書に引用されています。そしてこれらを紐解くと、王というのは地上の王様のことを言うだけではなく、この詩篇においては、イエスキリストが王であることを預言していると言えます。

共観福音書には、イエスが「わたしをだれか」と問うた場面で引用していることが書かれています。『**主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」**』と**言っているのですか。(マタイ 22:44)**。それに続いて、天の御座に着いたイエスは、再びおいでになることも語っているのです(マタイ 26:64)。教会が生まれた時、ペテロも説教の中で、このみ言葉を引用しています(使徒 2:34)。世界に散らされていたユダヤ人がその時エルサレムに集まっていたので、彼らの知っている詩篇を引用して、イエスキリストが主なる王であることを語ったのです。また、ヘブル 1:13 にもこのみ言葉引用されていますが、ヘブル書は祭司としての役割を語っているのです。**キリストは、罪のために一つのいけにえを献げた後、永遠に神の右の座に着き(ヘブル 10:12)**。キリストは、天のみ座に着いて礼拝を受けられているだけではなく、今も私たちのためにとりなしてくださっているのです。これが、過日、内田和彦先生が語ってくださったことでした。

天のみ座に着いておられるキリストは、屠られた神の子羊です。血を流しているのです。それは私たちを贖い、ご自分の命に替えて、私たちを生かしてくださるためでした。この方を目当てに、新しい週も歩んでまいりましょう。

信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。ヘブル 12:2